6月号グラビアOL前(20230516).pdf 3 2023/05/16 11:00

大きな「バリア」はどこにあったか

2 埼玉県桶川市（おけがわし）

桶川市として初めて常時車いすを利用する市議会議員となった浦田充氏は、バリアフリーに関する政策を数多く提案している。その原動力は、議員は障害者をも含めた「全住民の代表」だという強い思いだ。「想像力」を駆使すれば当事者になり代わることができ、地域の見え方も変わってくるという。バリアフリー化が桶川市でどこまで実現しているか、実体験をまじえてご寄稿をいただく。 **詳細は本文 P〇〇～〇〇にて**

写真上左：
バリアフリー化実現へ一筋縄では行かない桶川駅の「ペデストリアンデッキ」

写真上右：
桶川市へ「ペデストリアンデッキ」バリアフリー化を求める署名提出の様子

写真下左：
浦田議員による議会での一般質問の様子

写真提供／浦田　充 氏
（埼玉県桶川市議会議員）

現地報告

埼玉県桶川（おけがわ）市

大きな「バリア」はどこにあったか

バリアフリーの街づくりに向けて

埼玉県桶川市議会議員
浦田（うらた）　充（みつる）

はじめに

明日、もし自分が障害者になったら――そんなことを考えたことがあるでしょうか。

２０１９年秋、桶川市として初めての常時車いすを利用する障害者の議員となりました（写真１）。

私の掲げた政策の多くは、バリアフリーに関することです。ただ、私は、当時27歳と最年少でもあったため、若者ならではの政策にも取り組みたいと思っていました。しかし、今でも私の一般質問などの主だった項目は「バリアフリー」についてです。それは、私の予想していなかった「バリア」、すなわち「バリアフリー」に対する意識・理解の欠落が行政・議会に大きいと感じているからです。

方法としての「想像力」

冒頭に書いたように、みなさんは、明日、もし自分が障害者になったら――などと考えたことがあるでしょうか。

そんな明日が来たとき、今日歩いた道を、明日歩けるでしょうか。車に乗れるでしょうか。トイレが使えるでしょうか。机の高さはそのままで大丈夫でしょうか。食器は持てるでしょうか。お風呂に入れるでしょうか。布団やベッドに入れるでしょうか。

「バリア」とは、身近な存在です。

健常者のままでは気づかないかもしれない。それは当たり前です。私も障害者でなければ、何も考えなかったかもしれませんし、実際に、自分と接点の少なかった障害、例えば聴覚障害や知的障害など対する理解は、必ずしも十分ではないと思います。ただ、障害者も含めた全住民の代表が、議員です。自身がすべての当事者となることはあり得ません。

しかし、一つ、当事者の代わりとなりうる方法があります。それが、「想像力」です。明日、もし自分が障害者になったら――。それを考えるだけで、まったく見え方が変わるのではないでしょうか。

「行政」との闘い

■街の玄関口の「バリア」

さて、私が重点を置いて取り組んできたバリアフリーの施策の一つに、桶川市の玄関口であるＪＲ桶川駅のペデストリアンデッキのバリアフリー化があります。

桶川駅のペデストリアンデッキは、駅と市立図書館や市役所連絡

024-027_現地報告_埼玉県桶川市・浦田充氏_cc2020.indd 24　2023/05/15 22:56

所なども入る大型商業施設を結ぶものですが、商業施設に入るには、10段以上の階段を下る必要があります（**写真2**）。その階段の元となる段差は、駅の高さと商業施設の高さの違いから生まれるもので、それが生じること自体は仕方のないことです。ただ、桶川駅のペデストリアンデッキには、スロープやエレベーターはなく、階段しかないため、車いす利用者やベビーカー利用者は使えません。また、通行者が非常に多いにもかかわらず、デッキには手すりもありません。

そこで、スロープなどの段差解消設備の設置、手すりの設置、それに加えて屋根の設置を求めていますが、これが想像以上にうまく進みませんでした。

これらが整えば、車いすを利用したり足が弱かったりする障害者はもちろん、ベビーカーを利用する方や高齢者、小さなお子さん、そして健常者も便利になる――そう思って訴え続けてきました。実際に、「あそこの階段がどうにかなれば」という方もいました。無理に階段を越えようとする高齢者もいました。

しかし、行政がとにかく動いてくれない。どうやったら動いてくれるのか、と四苦八苦している状態で、時間だけが進んでいきます。署名なども集めましたが、行政側は表向き拒絶しないものの、とにかく動かない（**写真3**）。そんな状態でした。

一般質問でも、工夫次第で各種設備の設置が可能であるにもかか

写真１　桶川市議会で一般質問を行う筆者

写真２　桶川駅のペデストリアンデッキ

写真３　ペデストリアンデッキのバリアフリー化を求める署名を提出する筆者（左）

024-027_現地報告_埼玉県桶川市・浦田充氏_cc2020.indd 25　2023/05/15 22:56

写真４　老朽化しつつある点字ブロック

返ってきた答えは、「総点検はできない。市民から指摘等があれば修繕する」。

たしかに、人的資源などが限られているのは理解できます。しかし、視覚障害者はそもそも視覚に障害があるのです。その視覚障害者が安全に通行するための点字ブロックを、なぜ言われるまで放置していいと思うのでしょうか。

私自身、視覚障害者ではありませんが、まさに、自分が視覚障害者だったらこんなところに住みたくない、と思わざるをえませんでした。

無理解と法軽視

また、障害者への無理解は、行政運営をするにあたり知っていなければならないことの無理解、そして街づくり全体にも影響することもあります。

「バリアフリー基本構想」を聞いたことはありますか。

２０１８年にバリアフリー新法が改正されたことにより、市町村は、街のバリアフリーに関する基本計画である「バリアフリー基本構想」の作成が努力義務化されました（法25条）。

桶川市は作成していないため、早期の作成を再三求めてきましたが、担当部長が「作成は努力義務ではないし、作成予定もない」と改正前の法律で答弁することもありました。

そもそも、バリアフリー基本構想は、自治体の街づくりをする一つの指針となるものです。桶川市においても再開発事業が行われており、基本構想を作成する意義は大きいものと考えられます。したがって、努力義務かどうかにかかわらず、作成してほしいものです。

しかし、現実は作成するどころか通告を出している質問に旧法で答弁するほど、バリアフリーに対する無関心なのです。

明日、もし自分が障害者になったら――。

この視点があれば、行政も基本構想作成に取り掛かるのではないでしょうか。

小さな変化

他方、訴えが通り、変わってきているところもあります。

まず、先述のペデストリアンデッキのバリアフリー化。最も簡単かつ、低予算な手すりについても、当初まったく前向きではありませんでしたが、ついに今年度から設計が入ることになりました。一歩とは言わないまでも、半歩くらい前に進んでいると思います。

次に、バリアフリー化補助金制度。街のバリアフリー化には、民間事業者の協力も欠かせません。しかし、現実には、財政面などから中小企業やお店では難しいこともあります。そこで、バリアフリー化するにあたって、補助金を出す仕組みを訴えていました。そして、今年度から、事業者等にスロープや手すり、文字盤等の設置について20万円までの補助金制度わらず、何かとやらないための理由をつけた答弁を続けられてきました。健常者にとって、あまり大きな問題ではない、面倒なことなのかもしれません。しかし、どうでしょうか。

明日、もし自分が障害者になったら――。

誰の、何のための設備か

もっと、驚いたこともあります。点字ブロックの拡充や補修についての質問をしている中で、かなり劣化している部分が多いため（写真４）、市内の点字ブロックの総点検を、と訴えました。

024-027_現地報告_埼玉県桶川市・浦田充氏_cc2020.indd 26　2023/05/15 22:56

が設けられました。

また、障害者手帳。手帳は、公共交通機関や公共施設等利用時に使いますが、毎回持ち歩く必要がありました。ただ、今では障害者手帳アプリという便利なものが存在します。アプリをスマホに入れれば、それが障害者手帳の代わりになるのです。しかし、桶川市では私が一般質問で取り上げるまで、コミュニティバスなどで使うことはできませんでした。それが、一般質問の約3か月後から、利用可能となったのです。

あるいは、聴覚障害者を対象とする補聴器助成。それまで18歳までとされていた助成の対象拡大を求めていましたが、本年度から一般的な大学卒業年齢である22歳までの拡大が実現しました。

他にも、小さな施策の実現はあります。ただ、例に挙げたものも含め、これらのほとんどは、多くの人の生活には影響しないでしょう。しかし、議員は、あらゆる少数者をも含む全市民の代表なのです。

もし明日、自分が障害者になったら――。

そう考えることで、きっと、何か見え方は変わるはずです。

障害者議員の「手足」

さて、そんな桶川市の行政に対しては、協力を仰ぎつつ、闘っているのですが、議会の障害者に対する理解には、正直、「絶望」しました。

例えば、参議院に二名の重度身体障害者の議員がいますが、国会内での介護費用は参議院が負担することになっています。国会での活動において介護が必須であり、なければ議員としての活動を行うことができないからです。

しかし、桶川市議会では、障害者の議員の介護費用負担は、全額自己負担です。議会中は、1時間当たり3000円程度の介護費用を、全額自分で負担しています。

私は、家族の支援などもあり何とかやっていますが、議員報酬の大半が、議員活動での介護費用に消えるのです。そのような状況のなか、明日、もし自分が障害者になったら、あなたは議員を続けられますか。

介護・介助は、健常者が自由に使える身体の一部の代替、つまり私の「手足」なのです。健常者が自分の手足を使うことに、特別なお金はかかりませんが、障害者はそうはいきません。当然、介護費用を負担してもらっても、それは、介護者の給与等となるのであり、私が手にすることはありません。

それゆえ、例えば国会では院が出していますし、今では国も障害者の就労者に対する介助費用の支援を推奨しているのです。

しかし、桶川市議会では、例えば最大会派が議会活動での介助費用を議会などが負担することは「議員特権だ」「市民に説明ができない」「初めからわかって出馬しているはず」などと反対しています。第2会派も「議員がサポーター・ボランティアを募るべき」などと非常に消極的で、ついに任期満了までにこの問題が解決する見込みは立っていません。

他自治体はどうでしょうか。例えば、今障害者議員がいなくて、すぐにその必要性がないとしても、介助費用負担などについて議論する必要はあるのではないでしょうか。いつどこでだれが障害者になるかはわからないのです。

明日、もし自分が障害者になったら――。

おわりに

明日、もし自分が障害者になったら、あなたは、自信をもって、今の街で暮らせるといえるでしょうか。あるいは今の立場であり続けられるといえますか。

障害者は、特別な存在ではありません。いつ、どこで、誰が障害者になるか、わかりません。そして、現に私のように障害者として生きている人がいるのです。

明日、もし自分が障害者になったら――。

ぜひ、一度真剣に考えてください。

偶然、障害者に生まれた、一若造議員である私から、全住民の代表の地方議会議員の皆さんへのお願いです。

024-027_現地報告_埼玉県桶川市・浦田充氏_cc2020.indd 27 2023/05/15 22:56